



《参考資料》

《参考資料》さくらメモ

No.1

日本三大桜 日本五大桜	日本最古で、推定樹齢約2,000年の山高神代桜(山梨県)と根尾谷(岐阜県)の淡墨桜、三春(福島県)の滝桜は、【日本三大桜】と呼ばれています。 日本五大桜とは、石戸蒲桜(埼玉県)と狩宿の下馬桜(静岡県)を加えたものです。
桜の植物分類学上の位置	桜はバラ科に属する バラ科の中に 1.バラ属 2.サクラ属 3.リンゴ属 4.ナシ属等がある。
バラ科サクラ属は	①サクラ亜族 ②ウワミズザクラ亜族 ③バクチノキ亜族 ④モモ亜族 桃やアーモンド ⑤スモモ亜族 梅、アンズ、スモモ
バクチノキ(博打の木)	樹皮が松の木のように剥がれ、一部の樹皮が剥がれている様子を博打で負けて衣装を剥がされた時の姿に似ていると言うので付けられた。 秋にイヌザクラの花に似た白い花が咲く樹皮は咳止め、鎮静剤の薬になる。
サクラ亜族は	1、サクラ節 山桜と里桜 2、ユスラウメ節 中国から渡ってきた。 3、セイヨウミザクラ節 明治時代に西洋から 4、ミヤマザクラ節 高地に咲く桜
日本の桜は大きく二つ、 山桜と里桜に分れる	1、山桜(野生種、自生種) 約12種類 もともと日本の山野に自生していた桜名前の語尾に山桜、豆桜と桜が付く 2、里桜(栽培品種、園芸品種) 人間が作り出し、栽培している桜 250品種以上ある。 名前の語尾に染井吉野、御衣黄と桜がつかない 八重桜、彼岸桜と例外はある。

<p>日本に自生する原種</p>	<ol style="list-style-type: none"> 1、寒緋桜 (カンヒザクラ) 2、江戸彼岸桜(エドヒガンザクラ) 3、山桜 (ヤマザクラ) 4、大島桜 (オオシマザクラ) 5、大山桜 (オオヤマザクラ) 6、霞桜 (カスミザクラ) 7、豆桜 (マメザクラ) 8、高根桜 (タカネザクラ) 9、丁子桜 (チョウジザクラ) 10、深山桜 (ミヤマザクラ) <p>番外1. 山桜の 稚木の桜 (ワカキノサクラ) 番外2、サクラ属② ウワミズザクラ亜族の犬桜(イヌザクラ)</p>
<p>寒緋桜 (カンヒザクラ)</p>	<p>中国や台湾の桜、石垣島に自生する。 早春の寒い頃から開花する。 花の色は濃紅紫色、花弁は5個。 花は平開せず鐘形に下垂する。 花びらがくついたまま落花。 最近、東京でも咲き、人気がある 別名 緋寒桜(ヒカンザクラ)。 学名はcampanulata「鐘型の」</p>
<p>江戸彼岸桜 (エドヒガンザクラ)</p>	<p>山地に生え高さ20m以上の高木になる。 花はやや小型で花弁は5個 花色は紅色から白まで変異が大きい。 東北地方では花の色が濃く、生息地が南下すると白くなる傾向 若木は花の色が濃く、老木は白くなる。 しだれ桜はエドヒガンザクラの変種。 花は彼岸の頃、咲き、性質が強く、長寿なので、各地に巨木、名木で残り、天然記念物も多い 花柄が膨らみ、蕾の時、ひょうたん型なので、「ひょうたん桜」とも呼ばれる 開花時、葉が出ないため「姥桜」とも言われる。</p>

山桜 (ヤマザクラ)	日本の野生桜の代表、山地に広く自生。高さ20m以上の大木も各地で見られる。 花は直径3cm、色は淡紅色を含む白色。褐色の新芽が開花と同時に芽吹く。 花よりも葉が先に出ているので、出っ歯の人を山桜という。
大島桜 (オオシマザクラ)	伊豆地方に自生する桜、緑色の葉とともに咲く。花色は白色で直径4cmと大型、芳香がある。 葉を塩漬けにして桜餅を包むのに使われる。染井吉野を始め、里桜の母種になっている。 丈夫で成長が早く、他の桜の接木の台木となる。薪を作るために植えられ「焚き木桜」ともいう
大山桜 (オオヤマザクラ)	普通の山桜に比べて葉や花が大きい。寒地の山地の桜で高さが15mになる。 花芽は寒地で生育するために粘性を持つ、花は大型で、花弁は5個。 花の色は紅紫色で濃く、別名 紅山桜。北海道に多いので、蝦夷山桜とも言う。
霞桜 (カスミザクラ)	山地に多く自生する。高さ25mになる木もある。 花は葉と同時に白色から淡紅色。山桜に似ているが花期は遅い。 「ケヤマザクラ」は近似種?
豆桜 (マメザクラ)	落葉の小高木、花は小型で白色又は淡紅色。 挿し木でも簡単に育つため、桜の盆栽は豆桜系が多い。 富士箱根に多いので別名が「富士桜」
高根桜 (タカネザクラ)	夏に咲く高山の桜。日本の桜の中で最も標高の高い所で咲く桜。 高山は強風のため、背が低く、幹は太い。花が咲く頃、葉も同時に出てくる。 花は淡いピンク色、別名 ミネザクラ。
丁子桜 (チョウジザクラ)	毛深くて花は丁子そのまま、落葉小低木、アジサイのように根元から幹を出す。 花は沈丁花のように長い筒型で白色、花の芯部が淡紅色で別名が「メジロザクラ」。
深山桜 (ミヤマザクラ)	深山で葉が伸びてから花が咲く。高さ15m位になる木もある。 花期は5月下旬から6月 花は白く、小型、4~7花が寄り添い上向きに咲く。 深山桜の材は堅いので家具や運動用具の材料になる

山桜の 稚木の桜 (ワカキノサクラ)	<p>落葉低木、樹高は2～4m。 花序は散形状で2～3花からなり、白色で基部がごく僅か淡紅紫色を帯びる。 「稚木の桜」は、他の桜と性質が違うという。</p>
ウワミズザクラ亜族の 犬桜(イヌザクラ)	<p>花が「猫じゃらし」のような形をした桜。占いに使われ、よく神社に植えてある。 高さは10mから15mになる。4月から5月に咲き、花色は白く 別名シロザクラ</p>
日本の桜	<p>同じ「江戸彼岸桜」でも各地に残っている古木は、野生の桜10種が自然交配を重ね、各地域の生育環境にあわせて微妙に違う江戸彼岸桜になっている。 日本の桜は一本一本がそれぞれ個性豊かな雑種といえる。</p> <p>日本は江戸時代までそれぞれの地方の文化を尊重した多様化した社会だった。 それが明治の欧米化近代化が進み日本の桜の8割は「染井吉野」という画一的な社会になってしまった</p>
「さくら」の語源	<p>「サクラ」という名前の由来は、一説に「咲く」に複数を意味する「ら」を加えたものとされていて、元来は花の密生する植物全体を指していたと言われています。また、春になると里にやってくる稲(サ)の神が憑依する座(クラ)だから「サクラ」になったという説もあります。</p> <p>他には、桜の霊である「木之花咲耶姫(このはなさくやひめ)」が、富士山の頂から最初の桜の花の種をまいて花を咲かせたので、姫の名前から「さくや」ととって「桜」になった、という説も伝わっています。「木之花」は「此花」とされる場合もあります。「古事記」にも出てくるこのお姫様の名前は「この花(桜)のように美しい姫」という意味があるそうです。</p> <p>古代の日本では、山に咲くヤマザクラ(山桜)や、八重咲きの桜が一般的な桜の花でした。今では大変有名な吉野の桜も、ヤマザクラです。</p> <p>さくらの語源については、いくつかの説があります。 その一つに、古事記に登場する「木花開耶姫」(このはなさくやひめ)のさくやが転化したものだという説があります。 また、さくらの「さ」は穀霊(穀物の霊)を表す古語で、「くら」は神霊が鎮座する場所を意味し、「さ+くら」で、穀霊の集まる依代(よりしろ)を表すという説があります。 昔から、桜の開花が農作業の目安の一つになっていたことを思えば、いにしえの人々が桜に実りの神が宿ると考えたとしても不思議ではありません</p>

さくらと日本人

平安時代より前までは、野生の桜を鑑賞していました。

日本書紀(720年)には、神功皇后の時代にすでに鑑賞されていたことが書かれています。

また、奈良の吉野山は桜の名所となっており、持統天皇(686~697年)は花見のために何度も訪れました。

桜は万葉時代の歌にも詠まれています。その数は梅よりも少ないものでした。それは、梅を愛でる大陸の文化に貴族たちがあこがれていたためです。

平安時代(奈良時代との説も)に入って、野生の桜を都市部に移植して鑑賞するようになりました。

桜の花見の風習は、9世紀前半に嵯峨天皇が南殿に桜を植えて、宴を催したのが最初と言われています。その後、貴族から武士や大衆へ、そして都から地方へと広まっていきました。

桃山時代には、豊臣秀吉が吉野と醍醐(京都)で盛大な花見を催しました。花見の楽しみが一般に知られるようになり、大衆にも一層身近なものになりました。

江戸時代に入ると、3代将軍家光が上野に寛永寺を建てて吉野の桜を移植し、隅田川河畔にも桜を植えました。また、8代将軍吉宗が飛鳥山を桜の名所にしたことも有名です。

花見はますます庶民に広がりました。

江戸時代の前半には、桜が一気に散る様が武士に嫌われたようですが、泰平の世に入り、歌舞伎の忠臣蔵で「花は桜木、人は武士」という台詞が使われたことで、武士の桜嫌いは消えていったとも言われます。

更に、江戸時代末期に登場し、あっという間に全国に広まった染井吉野のおかげで、日本中に花見の風習が広く普及し、深く浸透していったと言えるでしょう。

一方、兵士は桜のように潔く散るべしとして、戦争中は軍国主義の道具として使われた悲しい歴史もありました

幕末の桜を 救った人たち

江戸時代後期には、品種改良により桜の新しい種類が急速に増加しました。江戸時代末期には少なくとも250ほどの種類が存在したのではないかと言われます。これらの桜は、大名の江戸屋敷などにも多く植えられていました。

ところが、明治維新の際、放棄された東京の大名屋敷は荒廃し、植えられていた桜を含む樹木が切られることもしばしばでした。また、社寺の庭園の桜も同じように伐採されることが多かったそうです。

駒込の植木屋、高木孫右衛門たちが、それらの桜を惜しみ、自宅に集めて保存に努めていました。

ところで、明治18年、荒川の堤防が改修される際、堤防上に桜を植えてはどうかという村民からの要望が出ました。堤防の修理を提案した戸長の清水謙吾は、どこにでもある染井吉野ではなく、サトザクラ類の優れた品種を植えたいと考え、旧知の仲だった高木孫右衛門と交渉し、彼が集めた桜78種3225本をそっくり堤防上に植えました。

もしこのとき、当時流行の染井吉野が植えられていたら、現代の私たちが見ることのできる江戸時代の品種はもっと少なかっただろうと言われています。

桜が植えられたのは、江北から西新井の間です。明治19年に植えられた桜は、明治36年には見頃になり、明治45年頃までがもっとも立派だったそうです。

ところが、ここで荒川堤の桜を不幸が襲いました。河川改修工事などにより次々に伐採され、昭和7年には52種555本にまで減りました。更に、堤防上が未舗装の国道になっており、交通量が多いため土ぼこりがひどく、枯死する桜が多かったそうです。

工事によって桜が伐採されることはよくあるようです。秋田県角館町の桧木内川の堤防は桜並木で有名ですが、現在の桜並木は川の右岸にしかありません。昔は左岸にもありましたが、堤防工事によって伐採されてしまったそうです。

身近なところでは、1本だけあったはずの上野公園のコブクザクラが、1999年春に行なわれた歩道の拡張工事に伴いなくなってしまったようです。

	<p>桜を愛するものとしては、工事を計画される方、そして工事を行なう方に、もう少し桜を大事に考えていただけたら幸せです。</p> <p>荒川堤への桜の植栽事業に最年少で参加し、桜の維持管理も行なっていた船津静作は、品種の絶滅を恐れ、自ら苗園を作り育成・保存をするようになりました。また、ここで育成した桜を全国各地に、そしてアメリカ合衆国ポトマック河畔やイギリスのケント州等にも送り出しました。</p> <p>こうして、江戸時代に豊富にあった品種はその数を減らしつつも、桜を大切に思う人たちの手を経て現在に受け継がれてきたのです。</p> <p>荒川堤の桜は残念ながら絶滅してしまいました。しかし、アメリカに渡った桜は元気に生き残り、また子孫を残していました。1981年にワシントンから35種約3000本の桜の苗を持ち帰り、足立区内に植えました。足立区政50周年を記念しての桜の里帰りでした。</p> <p>桜たちもきっと祖先の土地を再び飾ることができて喜んでいることでしょう。</p>
さくらの日	財団法人日本さくらの会が平成4年に制定した、「さくらの日」(3月27日)もあります。
野生のさくら	ヤマザクラ・オオヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガン、マメザクラ、カンヒザクラ
園芸品種のさくら	染井吉野(ソメイヨシノ)、普賢象(フゲンゾウ)、関山(カンザン)、一葉(イチヨウ)、松月(ショウゲツ) など多数
ソメイヨシノが好まれた理由	桜の種類によっては、花と葉がほぼ同時に開くものがありますが、ソメイヨシノは先に花が咲き、後から葉が開くことや、花が少し大きめで花付きもよく、見た目が豪華だという特徴があります。また、成長も早く、10年ほどで立派な木になり、花を咲かせるのも早いため、明治時代に全国の公園や学校、道路や河川沿いなどに植えられるようになりました。

品種名	花色	弁数	弁の大小	開花期	他の特徴
天の川 (あまのがわ)	淡紅	15	大	4月中～下	幹・枝上方に直立し簞状となる
嵐山 (あらしやま)	淡紅	5～7	中	4月中～下	弁の先紅色が濃く二裂、微香あり
早晩山 (いつかやま)	白	13～15	大	4月中～下	蕾は淡紅色
鬱金 (うこん)	淡黄緑	10～15	中	4月中～下	花色に特徴あり
江戸 (えど)	淡紅	15～20	大	4月中～下	花の外弁紅色
大手毬 (おおでまり)	淡紅	20～30	大	4月中～下	枝先に花が毬状になる
菊枝垂 (きくしだれ)	淡紅	170内外	中	4月中～下	萼片5本
枝垂桜 (しだれざくら)	淡紅・白	5	小	4月中～下	満開時は白色に近い
上句 (じょうにおい)	白	5	中	4月中～下	芳香がある。枝は上向する
白妙 (しろたえ)	白	14～15	大	4月中～下	蕾は淡紅白色
泰山府君 (たいざんふくん)	淡紅	40～60	小	4月中～下	樹形簞状、花梗有毛
虎の尾 (とらのお)	淡紅・白	5～旗弁	中	4月中～下	花が枝先に尾状につく。旗弁あり
福祿寿 (ふくろくじゅ)	淡紅	15～20	大	4月中～下	花弁に波状のしわあり
御車返 (みくるまがえし)	白～淡紅	5～7	大	4月中～下	花弁に波状のしわあり、色に濃淡
楊貴妃 (ようきひ)	淡紅	18～20	大	4月中～下	蕾は球形で紅色、花は密に着生

桜を食す	<p>桜の葉は、さくら餅などの和菓子や料理などに使われます。食用となるのはオオシマザクラの若葉です。食用の葉の約80%は伊豆地方で生産されています。</p> <p>伊豆半島や伊豆大島では、葉をとるためだけにオオシマザクラを栽培しています。幹が大人の背の高さを超えてしまうと葉の収穫がしにくいため、根を残して幹を切り倒してしまいます。すると根の辺りから彦ばえが伸びてきて、数年後には再び収穫ができるようになります。</p> <p>桜の葉の持つ、あのいい香りの成分はクマリンといいます。生の葉には存在しませんが、塩漬け加工をしている間に別の成分がクマリンへと変化します。</p> <p>桜の花の塩漬けは、桜湯や和菓子、桜ごはん、お吸い物などに使われます。私はお酒が飲めないの縁がありませんが、日本酒や焼酎に浮かべられることもあるそうです。</p> <p>見た目が重視されるため、食用の花としては、色の濃い八重桜が好んで使われます。特に、カンザン(関山)という花がよく使われています。</p> <p>桜の花の塩漬けを、水でひと洗いたした後お湯に浮かべると桜湯(花漬、花湯とも言う)になります。</p> <p>現代では結婚式などおめでたい席で出されることが多い桜湯ですが、江戸時代初期までは、桜湯は縁起の悪いものとしてそうした席では嫌われていました。桜の種類によっては花の散り際に急速に色があせてしまいます。そのことを「桜ざめ」と言います。桜ざめが、気持ちさがめることに繋がると考えられ、おめでたい席で桜湯が出されることはなかったのです。また、桜の季節に婚礼を避ける風習まであったそうです。(逆に現代では、お茶が「茶を濁す」につながることから、結婚式では出さないようにすることもあります。)</p>
桜餅 関東風・関西風	<p>18世紀前半に、江戸向島長明寺の門番山本新六が、漬け込んだ桜の葉で包んだ餅を売り出したところ、折りからの花見ブームに乗って名物となりました。これが長明寺桜餅です。関東の桜餅は、小麦粉などで作った皮であんを包みます。</p> <p>一方、関西では粗くひいた道明寺粉(もち米の糯(ほしい。干飯)を臼でひいたもの)で作った餅であんをくるみます。</p> <p>同じ桜餅でも、関東と関西で少し違うようです。これまであまり意識しないで食べてきたので、今度は是非食べ比べをしてみたいものです。</p>

材木としての桜	<p>桜の材木は良質と言われ、目がつんでいるため昔は浮世絵などの版木として使われました。樹皮は古代から弓や刀の柄に巻きつけたそうです。また、現代でも箱などの細工物に使われます。</p> <p>ただ、現在ホームセンターなどで桜材として売られているものの中にはシラカバなどが含まれていることがあるそうですので、桜材にこだわって工芸をしたい方はよく確かめたほうがよいようです。</p> <p>桜材を電動工具で加工すると、桜餅と同じような香りが作業場いっぱいに広がります。確かに桜材なのだと感じる瞬間です。</p>
桜の分布	<p>サクラは主として北半球の温帯に広く分布していますが、美しい花の咲く種類はアジアに多く、しかも日本列島が中心で、多くの種類が集中しています。また、中国や朝鮮半島にもかなりの種類があり、日本と共通の種類もあります。その他、中国の奥地やヒマラヤ地方などには、日本のものと種類は異なりますが、ヒマラヤ桜のように美しい花の咲く種類が分布しています。ヨーロッパには、日本の桜のように花の美しい種類はなく、サクランボ、いわゆるミザクラの類があります。北米大陸には、我が国にもあるウワミズザクラに近いような種類や、常緑の種類などはありますが、これらは、日本人の持っている桜の概念からかけ離れた種類ばかりです。</p>
桜の形態	<p>●木の大きさと樹形</p> <p>サクラには、ミネザクラ、チシマザクラのように、高さが2m前後の低木から、ヤマザクラ、オオシマザクラ、エドヒガンのように20m以上の高木になるものまであります。一般には丸い平らな樹冠を作り、主な枝は斜上する樹形のものが多く。しかし、枝の垂れるシダレザクラや枝が横に広がる染井吉野、普賢象、箒状となる天の川、泰山府君など樹形に特徴のあるものもあります。また、同一の種類でも個体によってかなり樹形の異なるものもあります。</p>




箒状

盃状




広卵状

傘状

枝柳状

<p>桜の分類</p>	<p>サクラは植物学上、バラ科、サクラ亜科、サクラ属の落葉高木または低木の樹木です。サクラ属はサクラ、ウワミズサクラ、スモモ、モモ、ウメ、ニワウメの6亜属に分けられます。一般にサクラとして鑑賞されている花の美しいものは、サクラ亜属に含まれています。</p> <p>日本にはヤマザクラ、オオシマザクラなど9種を基本にして、変種をあわせると100以上のサクラが自生しており、沖縄には野生化した1種があります。また、これらから育成された園芸品種は200以上もあります</p>
<p>原種のさくら</p>	
<p>ヤマザクラ オオヤマザクラ</p> 	<p><i>Prunus jamasakura</i> Sieb / <i>Prunus sargentii</i> Rehder</p> <p>ヤマザクラは、我が国の桜の中で最も代表的な種類で、古くから詩や歌に詠まれ親しまれてきました。別名シロヤマザクラとも呼ばれ、主に本州中部以南に自生しております。花は白色か淡紅色で、ときには香気の強いものもあります。清楚で一つの花だけを見ると、それほど目立ちませんが、開花と同時に出る若葉が紅・褐・黄・緑と木によっていろいろあり、葉の色と花の色との調和が美しく最高の気品があります。これに対し、主として中部以北に自生するオオヤマザクラ(別名・ベニヤマザクラ)は、花色がバラ色でヤマザクラより濃く、あでやかな美しさを持っています。葉や花などの各部分は、全体にヤマザクラより大柄で、また、りん片の外側が著しく粘るのが特徴となっています。</p>
<p>オオシマザクラ</p> 	<p><i>Prunus lannesiana</i> Wilson var. <i>speciosa</i> Makino</p> <p>房総半島・伊豆半島の南部・伊豆七島など本州の暖帯に自生する桜で、若葉は黄緑色、ヤマザクラと同様に花より先に開きます。花は白色で黄緑の若葉とよく調和し、優雅な美しさがあります。この品種は潮害、煤煙などに強く都市およびその周辺で街路樹や公園樹として広く植栽されております。葉は塩漬けにして桜餅を包む皮として利用されています。</p>
<p>エドヒガン</p> 	<p>•<i>Prunus pendula</i> Maxim. form. <i>ascendens</i> Ohwi</p> <p>本州・四国・九州と広く自生する桜で、別名アズマヒガン、ウバヒガンとも呼ばれています。花が早咲きである点一般在に歓迎され、古くから植えられてきました。花は一重と八重咲きのものがあり、花色は白色から淡紅色まで変化に富んでいます。枝の垂下するシダレザクラは、この種類の一型に属し、エドヒガン同様に花も色の白いものから淡紅色まであり、また、八重咲きの品種もあります。この桜は長寿で老樹が多く、各地に巨木・名木が点在しております。</p> <p>なお、彼岸桜・十月桜などは、エドヒガンに似ていますが、これらは別種です。</p>

<p>マメザクラ</p> 	<p><i>Prunus incisa</i> Thunberg</p> <p>マメザクラは富士・伊豆・房総を中心とする地方に自生する種類で、このため別名フジザクラ・ハコネザクラとも呼ばれています。名のように花は小さく、花色は白または淡紅色で品のある清楚な野生の美しさをもっています。低木状の木にいっぱい花を咲かせ、また萌芽力も大変よいので、盆栽あるいは庭木として最近は広く培養されるようになりました</p>
<p>カンヒザクラ</p> 	<p><i>Prunus campanulata</i> Maxim.</p> <p>ヒカンザクラとも呼ばれていますが、ヒガンザクラ(彼岸桜)と混同されやすいので、カンヒザクラの名が一般に用いられています。カンヒザクラは中国南部・台湾に分布するが、古くから琉球列島や鹿児島県に入り、石垣島や久米島などには自生しています。花は1～3月に葉に先だって開き(半開鐘状)、色は紅または濃紅で、一見紅梅か緋桃のようで美しく、今日では沖縄から伊豆半島にかけて、温暖な地方で庭木として広く植栽されています。</p>
<p>園芸品種のさくら</p>	
<p>染井吉野 (そめいよしの)</p> 	<p><i>Prunus yedoensis</i> Matsum. cv. <i>Yedoensis</i></p> <p>野生種のヤマザクラのように園芸品種を代表する品種で、全国至るところに植えられています。花は淡紅色の一重で、新葉より先に密集して咲き、全枝が花にうずまるさまは、真に絢爛豪華です。繁殖が容易で生長も早く、また花つきも非常によいので急速に全国各地に普及しました。主に、公園・街路・学校・堤防などの公共施設に集団的に植えられています。この品種は江戸時代末期、江戸染井村(現在の豊島区駒込)の植木屋が「吉野桜」と称し、売り出したのが始まりで、その後、桜の名所、吉野山のヤマザクラと区別するため、この名がつけられました。</p>
<p>普賢象 (ふげんぞう)</p> 	<p><i>Prunus lannesiana</i> Wilson cv. <i>Albo-rosea</i></p> <p>室町時代から知られている、最も古い里桜の代表的な品種で、一名「普賢堂」ともいいます。普賢象の名は、花の中心部にある二枚の緑色の葉(雌しべが葉化したもの)が外側に曲がり、普賢菩薩の乗っているゾウの鼻に似ていることから、この名がつけられました。花は大形の美しい八重咲き、色は淡紅で、のちに白ぼくなりす。柄が長く花が垂れる上品な桜で、今日でも多く植えられております。樹勢は強健で大木(8～15m)になるので、公園または並木に適します。</p>

<p>関山 (かんざん)</p> 	<p><i>Prunus lannesiana</i> cv. <i>Sekiyama</i> 普賢象と同じく、古くから知られた里桜の代表的な品種です。花は大形の八重咲き、色は濃紅色であでやかな美しさがあります。このあでやかさが外国でも好まれ、アメリカ、イギリス、オーストラリアなど海外にも広く植えられています。樹勢は強健で成長も早く大木(9~13m)となります。枝が上向するので中庭園にも向きますが、大庭園や公園などの植栽に最も適しています</p>
<p>一葉 (いちよう)</p> 	<p><i>Prunus lannesiana</i> Wilson cv. <i>Hisakura</i> 花芯から一本の葉化した雌しべがあるので、「一葉」と名づけられました。花は八重咲き、色は淡紅色で満開になると白ぼくなり、花全体がややちぢれて見えます。花の大きさは普賢象などより少し小さく、柄の垂れる可憐な桜です。樹勢は強く、大木(8~12m)となるので広い公園や並木に適します。東京付近に多く植えられ、とくに新宿御苑、多磨墓地などには老木が多く有名です。</p>
<p>松月 (しょうげつ)</p> 	<p><i>Prunus lannesiana</i> Wilson cv. <i>Superba</i> 里桜の代表的品種で、花つきが非常によくたいへん優美な桜です。花は八重咲きで大きく、色は淡紅色(外弁は帯紅色、内弁は白色)で満開後は白ぼくなります。小高木(4~5m)で、枝が横にひろがり、樹形は傘形となります。枝が横に張るので、大庭園、公園などに適します。</p>

その他の園芸種

虎の尾
(とらのお)



花色：淡紅・白
 弁数：5～旗弁
 弁の大小：中
 開花期：4月中～下
 特長：
 花が枝先に尾状につく。
 旗弁あり

泰山府君
(たいざんふくん)



花色：淡紅
 弁数：40～60
 弁の大小：小
 開花期：4月中～下
 特長：
 樹形箒状、花梗有毛

白妙
(しろたえ)



花色：白
 弁数：14～15
 弁の大小：大
 開花期：4月中～下
 特徴：
 蕾は淡紅白色

天の川
(あまのがわ)



花色：淡紅
 弁数：15
 弁の大小：大
 開花期：4月中～下
 特長：
 幹：枝上方に直立し箒状となる

花見の歴史

平安時代以前は、野生の山桜を鑑賞していたといわれています。神功皇后の時代には、桜を鑑賞していたことや、持統天皇(686～697年)が花見のために、当時から桜の名所であった吉野山を訪れていることなどが720年に編纂された『日本書紀』に書かれています。また、『古事記』にも桜に関する記述を見ることができます。

しかし、万葉時代の歌にも桜を詠んだ歌もありますが、当時、梅を愛でる大陸の貴族文化に対する憧れが強かったこともあり、梅を詠んだ歌よりも少ないようです。

平安時代に入ると、野生の桜を都に移植して鑑賞するようになります。

花見の習慣は、嵯峨天皇(786～842年)が御所内の南殿に桜を植えさせて宴を催したのが始まりといわれており、その後、貴族から武士や庶民へと広がり、都から地方へと伝播していったといわれています。

桃山時代には豊臣秀吉が吉野(奈良)と醍醐(京都)で盛大な花見を催します。花見の楽しみが一般にも広く知られるようになり、庶民にも一層身近なものになりました。

江戸時代の前半には、桜がいつせいに散る様子が武士に嫌われていたようですが、合戦がなくなったことや、「花は桜木、人は武士」という台詞が歌舞伎で使われたことなどから武士が桜を嫌うことがなくなったともいわれています。

また、3代将軍徳川家光が上野(東京)に建てた寛永寺に吉野の桜を移植し、隅田川河畔にも桜を植えさせたほか、8代将軍吉宗が飛鳥山(東京)を桜の名所にしたことなどから花見はますます庶民に広がりました。

この時代には桜の品種が区別されたほか、江戸時代後期に入ると品種改良によって多くの桜が生まれ、大名屋敷の庭などにも植栽されるようになります。「染井吉野」もこの頃に誕生しました。江戸駒込の染井村から植栽が始められ、当初は見事な桜の代名詞として「吉野桜」と呼ばれていましたが、植栽地の地名を加えて「染井吉野」といわれるようになり、花見の風習が全国へと広がっていきました。

花見の歴史

しかし、明治維新以降、大名屋敷は荒廃し、植えられていた桜も伐採されてしまいます。それらの桜を惜しみ、自宅に集めて保存に努め、荒川の堤防改修の際にそれらの桜を植栽したのが駒込の植木屋であった高木孫右衛門たちで、78種3225本にもおよぶこの桜は、当時流行していたソメイヨシノだけでなく、江戸時代に品種改良された多くの桜を見ることができたそうです。

ところが、昭和の時代に入り、河川改修工事により、荒川の桜が伐採されてしまい、52種555本にまで激減してしまったうえ、堤防上が交通量の多い国道になっていたため、土ぼこりで多くの桜が枯死してしまいました。

また、その散り際の潔さを愛でられた武士道は、軍隊にも引き継がれ、「兵士は桜のように潔く散るべし」として若い兵士たちの命に喩えられたほか、日米友好の証としてワシントンに送られた桜なども敵国の花として伐採されてしまいました。

太平洋戦争によって焼失した桜も多く、また、高度経済成長の発展と共に道路工事などによって失われた桜も数多くあり、桜を愛でられる場所も少なくなっていました。

荒川堤にあった桜も現在では絶滅してしまい、江戸時代後期には350種類ほどもあった品種も今では減ってしまいましたが、今ある桜の木々たちは、桜を大切に思う人々の手によって守られています。

現代では花見のスタイルも多様化してきましたが、春の訪れを喜び、日々の仕事をから離れて、美しく咲き誇る桜を愛でる...古人が楽しんだ花見のスタイルだけは、今も変わっていません。古の人々に想いを馳せながら花見酒を楽しむのも一興ではないでしょうか。

日本三大桜

三春滝桜
(福島県
三春町)

日本を代表する巨木・三春滝桜は、天然記念物に指定されている名木です。三大桜の1本としてだけでなく、岐阜県の淡墨桜とともに東西の横綱桜とも言われています。

桜の種類としてはベニシダレザクラで、毎年4月中旬以降に開花します。

四方に伸びた太い枝から滝のしぶきのように花が咲き乱れるさまから滝桜と呼ばれるようになりました。樹齢は推定1000年以上とされています。

残念ながら2005年の1月、雪の重みで枝が10本折れてしまいました。



画像:(社)日本観光協会

所在地	福島県田村郡三春町 大字滝字桜久保地内
樹齢	1000年以上
樹高	12m
幹囲目通り	11m
枝張り	北へ4.6m、東へ10.7m、南へ 13.9m、西へ14.5m

日本三大桜

淡墨桜
(岐阜県
根尾坂所)

26代継体天皇が王位継承の混乱を逃れ、住んでいた根尾谷から離れる際に植えられたと言われる桜です。こちらも天然記念物に指定されています。

つぼみの時期は白、散り際には淡墨色になることから淡墨桜と名付けられました。

桜の種類としてはヒガンザクラで、樹齢は1500年とされています。



画像:(社)日本観光協会

所在地	岐阜県本巣市根尾坂所字上段995
樹齢	約1500年
樹高	16.3m
幹囲目通り	9.91m
枝張り	東西へ26.90m、南北へ20.20m

日本三大桜

神代桜
(山梨県
武川町)

日本武尊が植えたと言われている、日本一の古さと大きさを持つ桜で、もちろん天然記念物です。山梨県の実相寺の境内にあります。

桜の種類としてはエドヒガンザクラで、毎年4月上旬が見頃です。樹齢は実に2000年とされています。

現在ではかなり衰えており、残念ながら枝の半分が枯れてしまっています。



画像:(社)日本観光協会

所在地	山梨県北杜市武川町
樹齢	約2000年
樹高	9m
幹囲目通り	約10m
枝張り	東西へ17.1m、南北へ12.4m